

「環境未来都市・下川」への疑問 ⑥

ルポライター・滝川康治(下川町在住)

難題山積のバイオ発電構想(中)

原料高騰の懸念も

現在、下川町が想

定する木質バイオマス発電の出力は5千キロワット。稼働には、町内の木質ボイラー施設向け燃料の50〜60倍もの林地残材など未利用材が必要であり、町内外から収集・運搬しなければならぬ。

経済産業省の試算

では、未利用材の場合、発電に必要な費用の約6割は原料費で占める。農林中金総合研究所の安藤範

親氏によると、林地残材を集材・搬出、チップ化するまでの費用は、経産省が想定した原料調達価格を上回る懸念があるという(「農林金融」13年10月号)。再生可能エネルギー買い取り制度(FIT)を使ってまなお、木質バイオ発電は原料

調達コストが高いという欠点を持つ。

日本の木材需給量

の半分を占める製紙用チップの7割は輸入品。残り3割の国産木材チップの価格はここ数年、そう大きな変動はない。だが、製紙会社などの大規模発電計画で、大きく変わる可

割高な原料の調達コスト

先進地 欧州では失敗が相次ぐ

くなり、採算性に悪影響を及ぼす。

上川総合振興局は

9月、木質バイオマス安定供給協議会を設置した。管内の関連事業体や森林組合、市町村、森林管理局などの関係者が集まり、木質バイオの活用策について議論を始めている。

性能がある。複数の

林業関係者は「町外から5万トンもの未

利用材を集めて発電

に使うと、原料チップが競合し、価格が

上昇するだろう」と

予測する。

遠くから原料を集めるほど、輸送費も増える。その結果、原料調達コストが高

北海道は地域の木材を地域で消費する

「木材地消」の運動

を進めてきた。未利用材も「木材」のひとつ。遠方から木質燃料をかき集めることと「木材地消」は矛盾しないのか。

導入事例に学ぶ

木質バイオ発電は

「木質バイオ発電

は原材料の安定供給

が大きな課題。買い

取り制度(FIT)の価格は魅力的で、

それを森林整備に振り向けたという気

持ちはある。(森林整備の)本来の姿とは

違いますが」と、同局の濱田革・林務課長が話す。

「多くの場合、事業として成功して

ない。とりわけ生木

由来の発電はすべてNG(失敗)。「増えすぎた発電施設の影響で、低質材の市場が破壊され、原材料価格は異常なまでに高騰し、その圧力によって、一部では森が荒れ、

え、1万キロワット

を下回る中途半端な

施設は技術的に成熟

していないため、故

障や稼働率の低減な

どが絶えない」と結

論つけた(詳細は同

プログラムの「欧州の木

質バイオマス発電は

成功しているのか?」を参照。

発電方式は、▽木

質チップなどをそのまま燃やして発電に

結びつける方法▽い

ったんガス化してタ

ービンやエンジンで

発電する方法に大

別される。下川町は

動きが加速してい

る」と報告。

「ガス化発電はタ

ール分の除去が難し

く、リスクが大き

い」と指摘するの

は、自然エネルギーの利活用を通して地

RC代表取締役の大友詔雄さん(68)

だ。

この方式は10年前、オーストリアで

始まった。6年前の

視察時、ガス化発電

の大宣伝を受けた。

だが、昨年の再訪

時には「ようやく進

んできた」との説

話の文中、「小林英

彰・上川北部森林組

合参事」とあるの

は、「田中英彰・上川

北部森林組合参事

」の誤りでした。訂正

いたします。

ベル。当面、ガス化発電装置の実用性はないだろう」と話す。

難題山積の発電に

こだわるとも、木

質ボイラーなどの熱

利用を充実させるほ

うが賢いやり方だ。

訂正 本企画第5

話の文中、「小林英

彰・上川北部森林組

合参事」とあるの

は、「田中英彰・上川

北部森林組合参事

」の誤りでした。訂正

いたします。



一の橋の木質ボイラー施設を視察する人たち(9月中旬)。発電よりも熱利用のデータ集めが先だ